

研究題目名 小学校第3学年児童における鉄棒運動の縦断的研究

研究代表者 針谷 美智子

本研究では、鉄棒を使った運動遊びの学習で行われる技について客観的に観察評価する際の指標を作成することを目的とした。その上で、作成した観察的評価基準にそって実際の児童の動きを評価し、運動の特徴について検討することとした。

調査項目として鉄棒運動の学習の中で最も初期段階の運動として取り上げられている①縦向き正面両足掛け屈腕逆懸垂、②正面支持、③腹掛け逆懸垂、④両膝掛け逆懸垂の4つの技を設定し、全体印象及び部分の観点から観察的評価基準を作成した。

作成した観察的評価基準を観察者Aによる2度の評価における動作得点の一致度から信頼性を検討した。さらに、観察者3名による動作得点の一致度から客観性を検討した結果、全体印象、部分の観点ともに評価の高いものであることが確認された。さらに、作成した観察的評価基準を適用し、小学校1年生から4年生までの児童457名の動きを分析した結果、全体印象において4つの技ともに正規分布に近い分布を示すことがわかった。

全体印象のパターン別に部分を観察した結果、縦向き正面両足掛け屈腕逆懸垂は、足を鉄棒に掛けて縦向き正面両足掛け屈腕逆懸垂になる過程において、体の位置を安定させて引き上げながら足を掛けることが最も難しい点であった。縦向き正面両足掛け屈腕逆懸垂の一連の動きができるようになるためには、動きのはじめから最後まで脇を締めた状態で体を操ることが必要となる。

正面支持は、とび上がりから、体を前傾させて保持姿勢に移行する過程、正面支持の保持姿勢とともに鉄棒を腕でしっかりと押して支持することが最も難しい点であった。正面支持の一連の動きができるようになるためには、腕支持感覚を十分に身に付け、鉄棒の上で体を操ることができることが必要となる。

腹掛け逆懸垂は、とび上がりから前方支持1/2回転し、足先が持ち上がる過程において、手首を返すということが最も難しい点であった。腹掛け逆懸垂の一連の動きができるようになるためには、鉄棒と頭の距離を保ったまま腰骨(足の付け根)を支点とした回転ができることが挙げられ、手首を返す動きができることが必要となる。

両膝掛け逆懸垂は、鉄棒から手を離して両膝掛け逆懸垂になる過程が最も難しい点であった。両膝掛け逆懸垂の一連の動きができるようになるためには、両膝掛け逆懸垂の逆位姿勢や力の使い方がイメージできることが必要となる。

以上のことから、調査項目とした4つの技について運動の特徴を整理することができた。今後は、作成した評価基準を適用し、単元を通して児童の動きを観察、評価していくことが課題としてあげられる。また、鉄棒運動の技は、本研究で扱った以外に多くの技が存在するため、他の技についても観察的評価基準を作成していく必要がある。